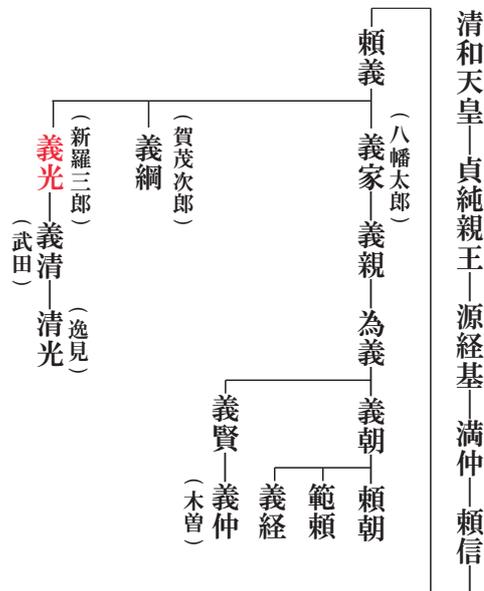


# 教えて♪ もくじい。シリーズ⑦

# 甲斐源氏と文化財

平安時代の中頃(今から約1,200年前)、武芸をもって朝廷や領地を守る存在として武士が登場しました。それから約150年後、都を守る武家の棟梁の地位を築いた清和源氏(※)の一族の中に、源義光が誕生しました。甲斐源氏は武名の高い義光の流れをくみ、甲斐国(現在の山梨県)に拠点を築いた一族です。武士団としての実力は鎌倉幕府を開いた源頼朝からも認められ、ライバルとしても恐れられました。彼らは源平合戦でも活躍し、その名を世に轟かせました。鎌倉時代以降も名門の待遇を受け、その末裔を称する人々は、北は北海道・東北地方、南は九州・四国地方に至るまで全国各地に展開しました。

※第56代天皇である清和天皇(850-881)の皇子や諸王を祖とする氏族。



源義光は近江国の新羅神社で元服したので「新羅三郎」とも呼ばれたんじゃない。弓馬と笙(雅楽の管楽器)の名人だったそうじゃ。身延町八日市場の大聖寺は義光が創建したお寺と伝わってある。甲州市菅田天神社に伝わる国宝の小桜韋威鎧兜・大袖付、通称「楯無の鎧」は義光伝来の甲冑とされ、戦国時代に武田家の家宝として神格化されたんじゃない。



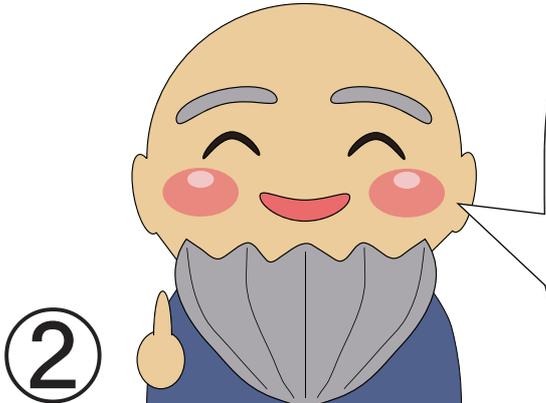
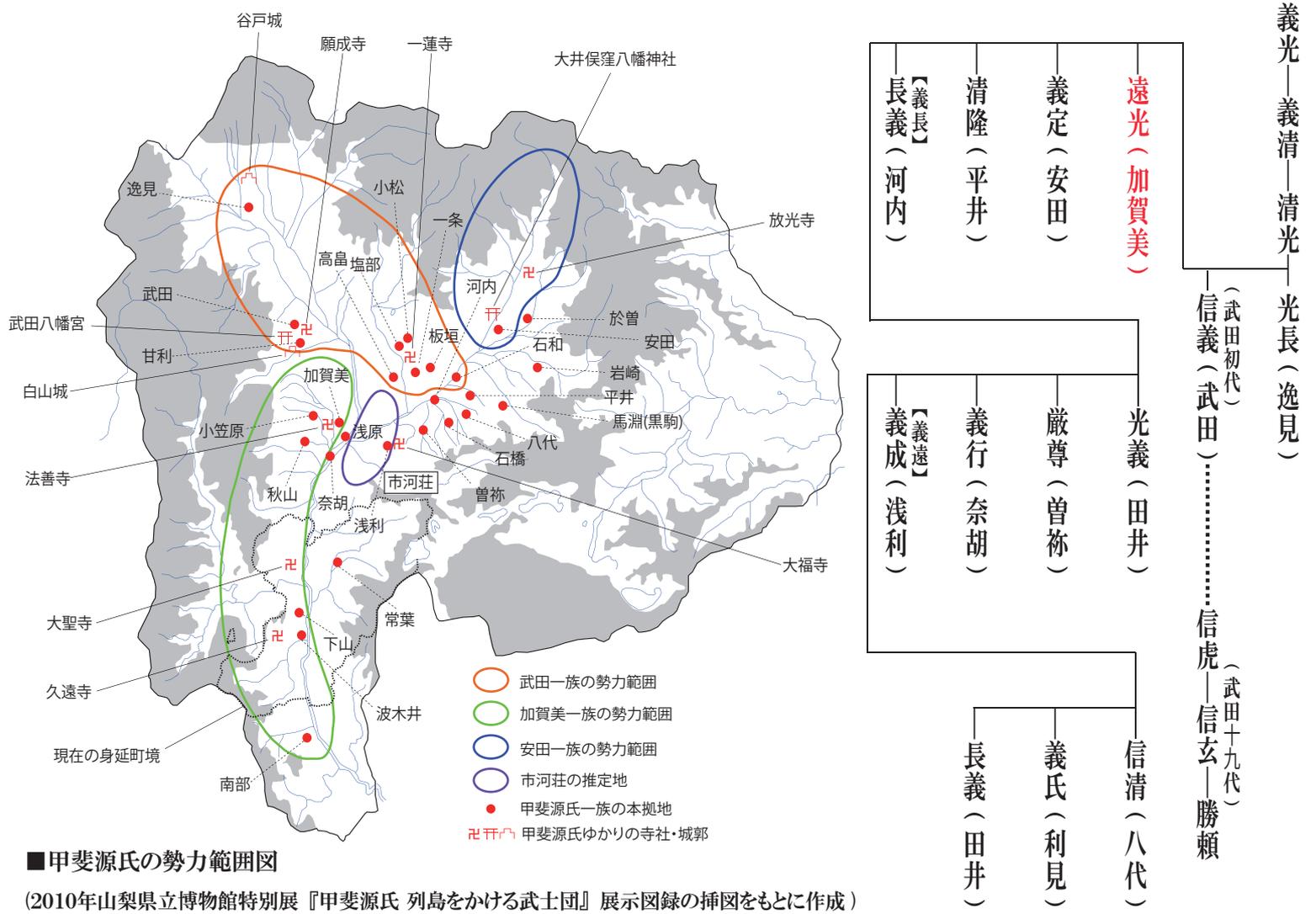
もくじい。は、身延町立木喰の里微笑館のオリジナルキャラクター

# 甲斐国への土着

※土着：人がその土地に(古くから)住みついていること。また、完全に住みつくこと。

甲斐源氏の始祖は源義光とされ、県内にも様々な傳承地が残っていますが、実際に領地をもったかどうかは諸説あります。義光の子義清とその子清光は常陸国那珂郡武田郷(現在の茨城県ひたちなか市武田)に土着して武田氏を称しています。義清・清光親子は大治5年(1130)、周辺の豪族と衝突し、裁定により常陸国より甲斐国へ追放された(あるいは積極的に進出した)と云われます。甲斐国の市河荘(※)を拠点に馬の一大生産地であった八ヶ岳南麓の逸見荘へ進出しました。清光の子孫は甲府盆地周辺や富士川流域へそれぞれ進出し、各地に勢力基盤を築いていきました。

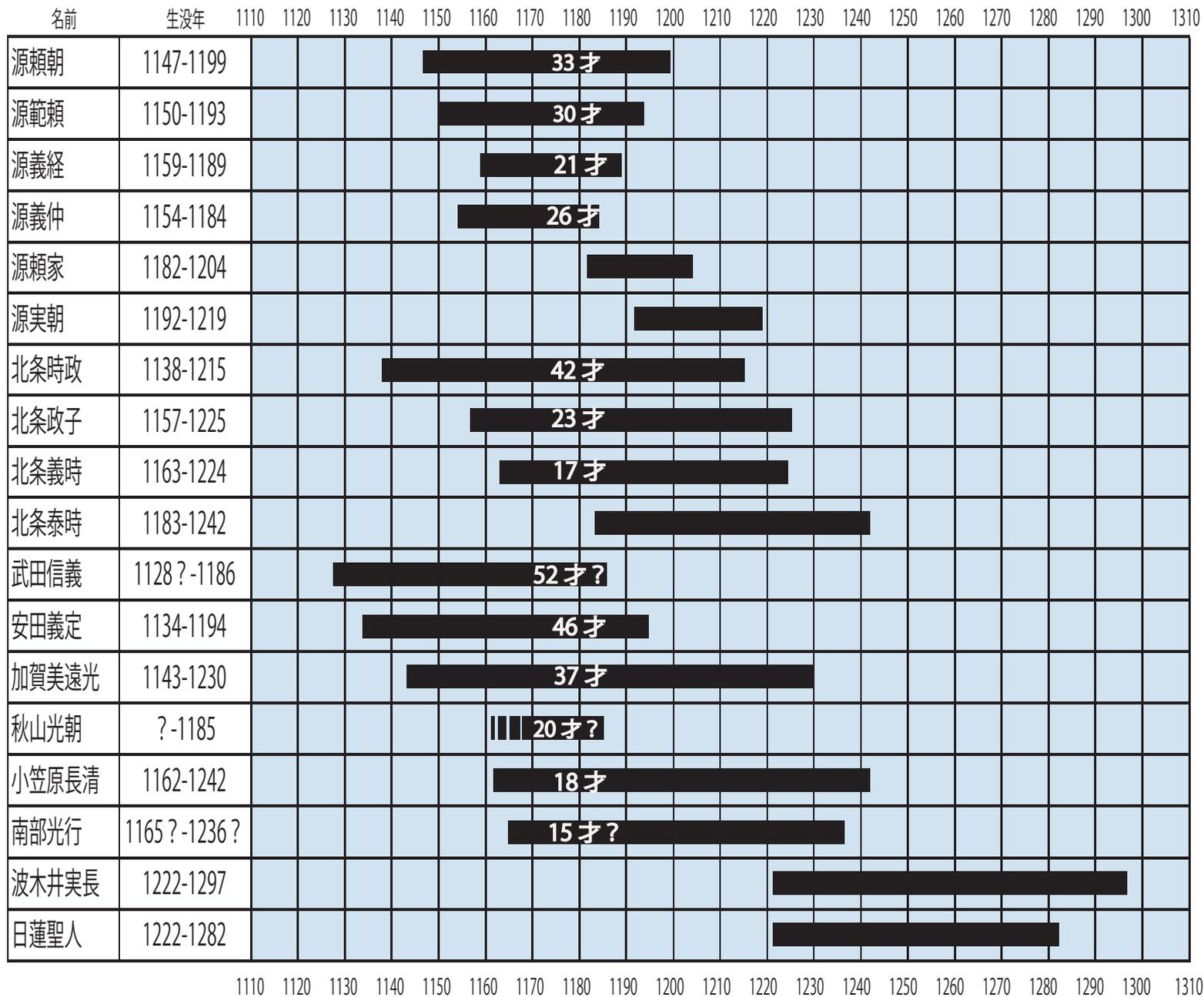
※市河荘の正確な範囲は解明されていませんが、義清の本拠は現在の市川三郷町の平塩岡とする説や、昭和町西条の義清神社とする説があります。



清光にはたくさん子供がいたんじゃが、次男の信義は武田氏の初代当主とされる人物じゃ。2022年のNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』にも登場しておったのう...。他の兄弟もみんな源氏一族じゃが、それぞれ本拠地とした地名を名字にしたんじゃ。

# 治承・寿永の乱

治承・寿永の乱とは、平安時代末期の治承4年(1180)から元暦2年(1185年)にかけて平清盛を中心とする平氏政権に対して国内各地で起きた内乱のことです。源頼朝や源(木曾)義仲など挙兵した勢力に源氏が多く、一般的には「源平合戦」と呼ばれますが、平氏に不満を持つ源氏以外の氏族も各地で一斉に蜂起し、日本全土を巻き込んだ歴史に残る大戦乱となります。甲斐源氏の中では武田信義や安田義定なども挙兵し、富士川合戦に勝利すると駿河・遠江両国(静岡県)へも進出します。義定は信義の長男一条忠頼や源範頼・義経とともに粟津合戦で源義仲を滅ぼし、一の谷合戦では平清盛の甥・経正を討ち取りました。



■甲斐源氏等年齢比較表 (棒線内の数字は治承4年(1180)時の年齢)

源平合戦で甲斐源氏の中心にいた信義や義定は、頼朝よりだいぶ年上だったんじゃ。同じ源氏一族の中でも、頼朝が甲斐源氏を恐れた理由が何となく分かる気がするのう。



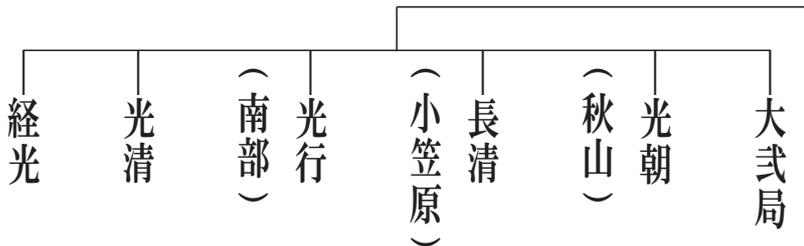
# 身延町ゆかりの甲斐源氏と文化財①

町指定

## ●加賀美遠光

源清光の四男で、加賀美、秋山、小笠原、南部各家の祖とされる武将です。武田氏初代の武田信義は兄にあたります。巨摩郡加賀美郷（現在の南アルプス市の一部）を本領とし、一族は甲府盆地西部から富士川流域に勢力を広げました。八日市場大聖寺の不動明王坐像は、承安元年（1171）、遠光が宮中において鳴弦の術（※1）を行い、怨霊を鎮めた恩賞として高倉天皇より下賜されたと伝わります。さらに遠光は特別「王」の一字を許され、加賀美氏の家紋は三階菱の中に「王」の字を配しています。文治5年（1189）には子息の小笠原長清、南部光行とともに奥州合戦（※2）に参陣しました。  
 ※1 弓に矢をつかえず、弦を弾いて鳴らすことにより気を祓う魔除けの術。  
 ※2 鎌倉政権と奥州藤原氏が東北地方で争った一連の戦い。頼朝はこの戦いに勝って東国に武士政権を確立しました。

清光  
—  
遠光



加賀美遠光画像

（大聖寺蔵：絹本着色甲斐源氏三将画像の一つ）

重文

遠光の妻は頼朝の御家人和田義盛の妹じゃ。娘（大弐局）は頼家や実朝の養育のため鎌倉御所へ参上しておるぞ。遠光は治承・寿永の乱ではあまり活動は見られんが、頼朝に接近することで一族の地位を固めていったんじゃのう。



## ●大聖寺の不動明王坐像

弘法大師作と伝わります。高倉天皇から仏像を賜った遠光は、お供に像を担がせて富士川沿いを帰国の途中、八日市場のあたりで急に空が曇り（日蝕であろうという）、胸苦しさに襲われると童子が忽然と現われ、「この近くに甲斐源氏創建の大聖寺がある。不動明王はそこに安置せよ」と言って消えたといいます。その様が日没の闇に似ていたので付近一帯（※）を「日下り」と言うようになったそうです。

※ 現在の国道52号線、八日市場と切石の間あたりのこと。

不動明王坐像

（大聖寺蔵：国指定重要文化財）

# 身延町ゆかりの甲斐源氏と文化財②

## ●秋山光朝

加賀美遠光の長男で、現在の南アルプス市秋山に居住して秋山氏を名乗りました。弟の小笠原長清とともに平知盛（平清盛の四男）に仕えましたが、治承・寿永の乱では源義経の指揮下に加わって、屋島の戦いや壇ノ浦の戦いにも参加しています。この戦いの途中で平重盛（平清盛の長男）の娘・重子を妻に迎えています。平家滅亡後は鎌倉に加賀美一族の館を構え、頼朝の警護に就きますが、甲斐源氏勢力の拡大を恐れる頼朝に疎まれて、謀反の罪で処刑されました。



町指定

下山城跡

(境内のオハツキイチヨウは国指定天然記念物)

## ●下山光重

秋山光朝と平重盛の娘との間に生まれた二男。建仁年間（1201-1204）に身延町下山の領主となって下山氏を名乗りました。下山氏の居館は本国寺周辺にあり、戦国時代には穴山氏が居住しました。



町指定

## ●本国寺の釈迦如来坐像

本国寺は光重の子息光基が文應元年(1260)に館の傍にお寺を創建したことに始まります。当初は阿弥陀如来を本尊としていましたが、光基の子が日蓮聖人に帰依し、後に光基自身も帰依して現在の寺号に改めたと云われています。日蓮宗では法華経を説いた釈迦如来を重んじており、一尊四菩薩(釈迦如来と四菩薩)、一塔両尊(題目宝塔と釈迦・多宝如来)という形で造立され信仰の対象になっています。本像は本国寺本堂に四菩薩とともに安置されていた仏像(※)です。四菩薩は江戸時代の作とみられますが、本像は鎌倉時代に遡ると考えられています。※現在は山梨県立博物館に寄託されています。



秋山光朝の三男光季は常葉氏を名乗っておる。光季の城館は旧下部小中学校のある高台に築かれたと伝わり、地名の五条ヶ丘は御城から転じたとも云われておるぞ。アニメゆるキャン△の聖地“本栖高校”として有名な場所になっておるが、地面の下には鎌倉武士の歴史が眠っているかもしれんわ。

※五条ヶ丘は縄文時代の遺跡にもなっています。

# 身延町ゆかりの甲斐源氏と文化財③

## ●南部光行

加賀美遠光の三男。治承・寿永の乱においては治承4年（1180）の石橋山の戦いで源頼朝に味方し、その戦功により甲斐国南部牧（現在の南部町南部）を与えられ、南部氏を称したといわれます。文治5年（1189）源頼朝は亡き母由良御前の供養のため鶴岡八幡宮に五重塔を建立しますが、光行はその祭礼の行列に加わっています。奥州合戦にも出陣し、その恩賞として陸奥国糠部郡（現在の青森県東部・岩手県北部）が与えられたと伝わります。



南部光行公像  
(道の駅なんぶ)



【系図主要参考文献】  
 『尊卑分脈』  
 『青森県史』所収「源氏南部八戸家系」  
 同 「波木井南部氏系図」



南部氏にゆかりのある10市町（※）では、歴史によって結ばれた「えにし」を温め、相互の振興を図ることを目的に「令和・南部藩」として交流事業を続けているんじゃ。平成31年（2019）に遠野市で行われた領民交流事業では、約400年前に南部氏が八戸から遠野へ入国した際の行列を再現した「南部氏入部行列」が行われ、身延町民も参加したんじゃ。  
 ※岩手県盛岡市・宮古市・遠野市・二戸市、青森県八戸市・南部町・三戸町・七戸町、山梨県南部町・身延町

# 身延町ゆかりの甲斐源氏と文化財④

## ●波木井実長

南部光行の六男で父より甲斐国巨摩郡飯野御牧三箇郷のうち波木井郷を譲られ、地頭職(※)に就きました。根城南部氏(八戸南部氏)の家祖とされる武士でもあります。嘉禎4年(1238年)、鎌倉幕府4代将軍の藤原頼経が上洛した際には、兄の実光と共に随兵を務めました。文永6年(1269年)頃、鎌倉で日蓮聖人の辻説法を聞いて深く感銘し、聖人に帰依したと伝わります。同11年(1274)、聖人は流罪を解かれて佐渡から鎌倉に戻りましたが、実長は聖人を身延山に迎え、草庵を造営、弘安4年(1281)には十間四面の新堂を建立し、「身延山妙法華院久遠寺」と命名しました。



久遠寺菩提梯脇の実長公像

※地頭とは貴族や寺社が支配する荘園や、国司の支配する公領の郡や郷ごとに、現地の治安維持や支配にあたらせるため鎌倉幕府が置いた役職です。それらの地頭を国ごとに指揮する役職が「守護職」です。

町指定



## ●開基堂と南部六郎実長公坐像

開山とはお寺を創立することとともに、創立した僧侶(初代の住職)を指す仏教用語であり、開基とはお寺の創立にあたって経済的な支援を与えた者、あるいは信者の実力者(大檀那)を指します。身延山久遠寺の開山は日蓮聖人、開基は波木井実長です。

久遠寺境内地の開基堂は実長を祀るお堂として、文明4年(1472)、日徳上人勸請により建立されました。二重塔で、丹塗りの古雅な九輪露盤が中央に聳えています。内部の優美な厨子の中には実長の像が安置されています。南部師行等が輿にのせ戦場を疾駆し、南朝のため忠勤ぬきんでたと南部文書にある由緒ある像です。

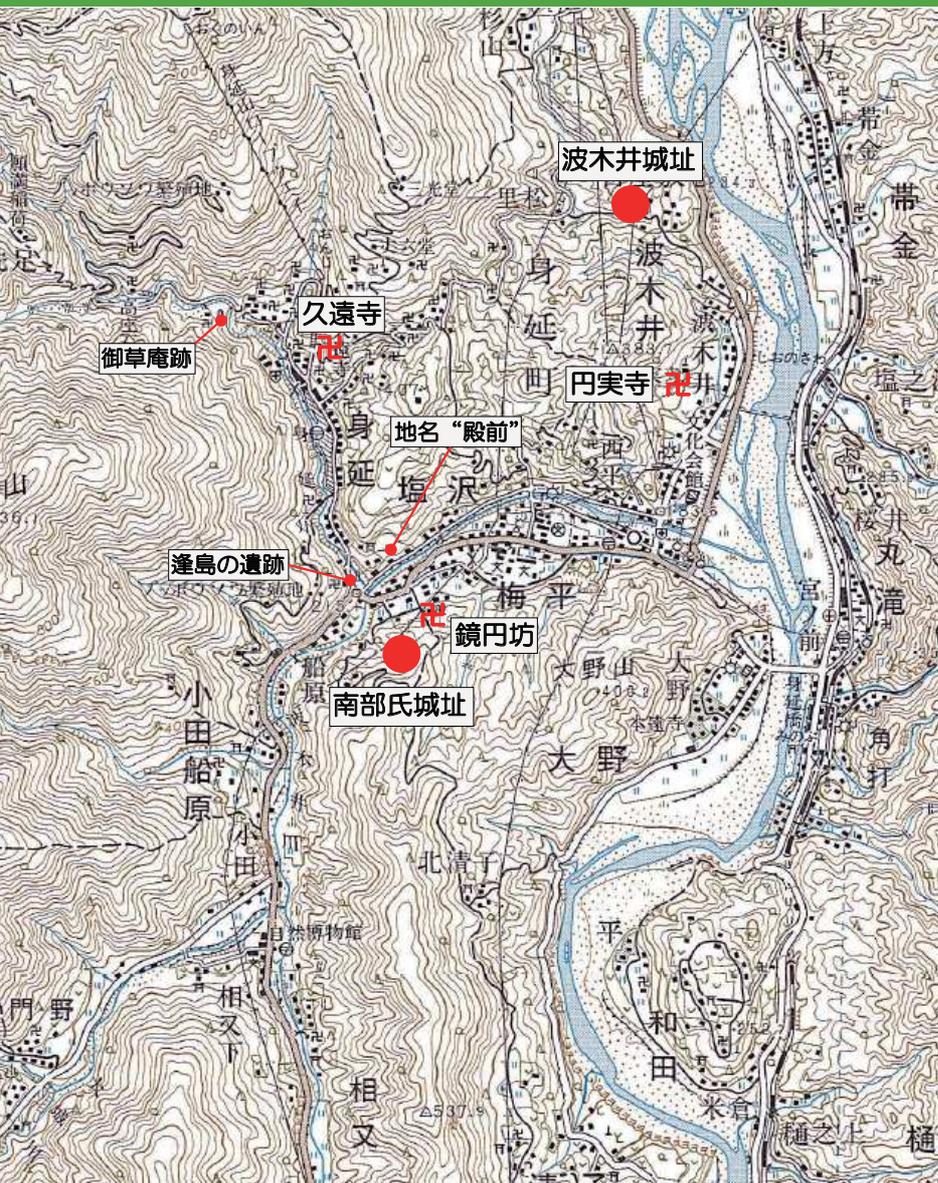
町指定



実長自身も出家して日円を号してゐる。弘安5年(1282)10月13日、日蓮聖人は61歳の生涯を閉じたんじゃが、遺言により遺骨を身延山に埋葬し、実長は六老僧(※)等と一緒に墓を護ったんじゃ。

※日蓮聖人が亡くなる前に指名した6人の高弟。日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持のこと。

# 南部氏ゆかりの史跡



## ● 鏡円坊と南部氏館址

鏡円坊は実長の次男の屋敷をそのまま寺院に改めたものと伝えられます。南部氏館址は鏡円坊の南西、一段高い山裾に位置し、40m四方広い平坦地となっています。昭和58年(1983)には通称「おかまど跡」と呼ばれるところで発掘調査が実施され、堀立柱建物跡や12世紀末頃の土器が出土しました。実長以下八世の南部氏は概ね200年間ここを本拠としたとも北方の波木井集落背後の山を屋敷としたも云われます。

町指定



波木井城址

## ● 円実寺と波木井城址

円実寺は実長が居住した館を、実長が出家して寺に改めたものと伝えられます。波木井城は実長の築城と伝えられ、身延山の東に突き出した東西182m、南北110mの小高い地は本丸があった所とされます。戦国時代、今川の将・福島正成が甲斐に侵攻したとき武田勢は大島で衝突し破れます。甲府での戦いに勝利した武田信虎は、福島勢に通じていた波木井三河守義実を「波木井の峯の城」にて滅ぼしましたが、この城は峯の城の候補地になっています。



8

今から約800年前の日本は、法律が争いの解決の手段として機能しない、無秩序で弱肉強食の時代。そこで自分の領地や領民を護るため、歴史の表舞台に登場したのが武士なんじゃ。武士は武士団をつくり、やがて平氏や源氏に代表される勢力へと成長していった。甲斐源氏の一族もそうした時代の中で全国各地に展開し、武家の名門として歴史に名を残していったんじゃ。

お問合せ先：身延町教育委員会 生涯学習課文化財担当（住所 身延町常葉1025 電話 0556-20-3017）  
発行年月日：令和4年10月20日